

**実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究  
実施方法等**

**1. 実践校について**

<b>実践校名</b>	(おおさかきょういくだいがくふぞくこうとうがっこういけだこうしゃ) 大阪教育大学附属高等学校池田校舎		
<b>学科名</b>	<b>生徒数</b>	<b>学級数</b>	
普通科	489	12	

**2. 実践研究の対象**

普通科 第2学年 163人 4クラス

**3. 実践研究の実施経過**

- ・ 4～3月：1年間を通して個人研究に取り組み、探究的に学びを深めた。
- ・ 4～7月：ジャーナリスト(NGO イラクの子どもを救う会代表西谷文和氏)の講演会、リトアニア隊報告会、JICA 青年海外協力隊員(8名)との学習会、TOK ワークショップ、世界一大きな授業、経済格差を実感するアクティビティ(世界のランチ)、フィールドワーク(生徒自身が計画をたてて自分の探究テーマにあう場所や機関を選び授業時間中に訪問、見学)
- ・ 夏休み：探究テーマに関する書籍を読みブックレポートを作成
- ・ 9～12月：外交官プログラム参加生徒の報告会、関西学院大学久木田純氏の講演、韓国サンダン高校との研究交流会(サンダン高校訪問)、研究発表とディスカッション(夏休みの活動、個人研究)
- ・ 1～2月：油藤商事・青山裕史氏の講演、個人研究の研究交流会、 研究報告書作成

**4. 実践研究の実施体制**

- ①総合Ⅱ担当者：実践校教員9名(国語1名、数学2名、理科2名、英語1名、地歴公民2名、保健体育1名)
- ・ コーディネーター：1名(国際教育委員)
  - ・ 外部講師交渉：3名
  - ・ IB/TOK(知の理論), CAS(創造性・活動・奉仕)導入：2名
  - ・ IB/E.E(課題論文)導入：1名
  - ・ 成果報告書編集：2名
  - ・ 提出物確認：クラス担任など
  - ・ 探究活動の指導：全員

②指導助言・協働研究者：大阪教育大学教員養成課程学校教育講座 瀬戸口昌也教授

## 5. 教育委員会等として取り組んだ内容

学習プログラムを開発するために、教育学的な理論や手法の研究が必要であったので、

①～③について実践校教員の研修を支援した。

①授業デザイン：逆向き設計による授業デザイン等の研修を受けるために E. FORUM（京都大学大学院教育学研究科実践コラボレーション・センター主催 スクールリーダー育成研修）への教員派遣

②国際バカロレア TOK：実践校における林田真紀子氏（名古屋インターナショナル・バカロレア TOK ワークショップリーダー）による研修会の開催

③国際バカロレア：日本国際バカロレア教育学会やシンポジウム等への教員派遣

## 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

実践校名：大阪教育大学附属高等学校池田校舎（普通科）

### 概要

総合的な学習の時間において SDGs の達成を課題とした探究学習に取り組み、校外活動や専門家との対話を重視した学習活動を通じて、キー・コンピテンシーを育む学習プログラムを開発する。

### 学習プログラムの目標

- ① 思考する力(批判的に考え、状況を分析する力)
- ② コミュニケーション力(他者と対話し、協働する力)
- ③ 自己管理能力(自ら計画し、責任をもって行動する力、リフレクションをする力)

### 学習プログラムの主な内容

総合的な学習の時間において ESD に取り組み、SDGs をテーマとした課題解決型の学習を実践した。SDGs は類型Ⅱ [g]国際貢献を含む国際社会における我が国の役割、[m]経済のグローバル化と相互依存関係の深まり(国際社会における貧困や格差の問題を含む)」を含む目標群である。生徒が個々に自ら課題を設定して取り組んだ。

#### ① 個人研究

生徒一人ひとりが SDGs に関連した研究テーマを選んで研究計画を立て、年間を通して探究活動に取り組んだ。ディスカッションを重ねて理解を深め、研究成果をレポートにまとめ、校内で中間発表後も継続して研究を進め、2月に本発表を実施した。

#### ② フィールドワーク

生徒一人ひとりが校外活動を計画し、実社会における経験を積んだ。それぞれの探究テーマに関連する場所や機関を探し、アポイントを自ら取り訪問、見学を行った。生徒によっては1回のみでの訪問にとどまらず、2回、3回と訪問して探究活動を行った。

#### ③ 外部講師による講演会

フリージャーナリスト、青年海外協力隊帰国隊員、国連職員から、紛争地域や途上国の現状や活動について、油藤商事取締役から、地域における活動について、講義をうけ質問をした。

#### ④ 批判的思考力の育成

IBDP のコア科目である TOK(知の理論)思考法を取り入れた授業を実施した。また日常的な活動全般において、批判的思考を促す問いかけを意識して指導した。

## 学習プログラムの成果の概要

本年度の学習プログラムの成果を、本プログラムの目標設定の理念であり、持続可能な社会の発展のために必要とされる「キーコンピテンシー」(DeSeCo)の育成という観点から概観すると、以下の点が指摘できる。

### 1. 相互作用的に道具を用いることができる能力

生徒は自分で設定したテーマを探究していくために、関連図書や統計資料、インターネットなどを参照し、課題解決のための道具として活用することが十分にできている。また、提出されたレポートの記述から、生徒は外部講師の講演などから得られた知見を基に、社会に対する自分の興味関心や問題意識を広げていることが分かる。生徒はすでに、1年生の時の「総合Ⅰ」の探究学習において、得られた情報や知見を整理・分析し、テーマを解決するための具体案を提示するという作業を経験しているが、今回の学習プログラムはその経験に基づき、そこで得られたスキルをさらに発展させているとすることができる。

また、レポートの概要を日本語だけでなく、英語で記述することは、探究の成果を海外に発信していくための基礎的作業であることを意識させることに有効であり、自分の思考と意見を異なった言語文化から見直す上でも意義のあるものである。

### 2. 異質な集団で交流することができる能力

本学習プログラムは、本校の2年生の全ての生徒を対象に行ったものであり、基本的には個人研究である。つまり同じ学校内の同じ学年・学級集団の中での活動なので、集団の異質性という点ではどうしても制約がある。しかし個人研究の途中経過を、小人数グループの中で発表したり、発表内容についてグループでディスカッションしたりすることによって、実社会の中で解決しなければならない課題をグループで共有し、共通理解を深め、解決の方策を協働して見つけ出そうとする態度は十分に養われていると言える。このような態度は、コミュニケーション力の伸長と、公共性の育成につながるものである。

### 3. 自律的に活動することができる能力

本学習プログラムは、2学年のカリキュラムの中でほぼ1年間をかけて行う長期的プログラムであり、テーマ設定から研究計画、探究活動、フィールドワーク、最終的なレポート作成までを一人ひとりが独自に行った。生徒の中には自分で設定したテーマを調査するために、専門家や関係機関などに直接取材したり、インタビューを行う者もいた。このような活動は、複雑な社会状況の中で生きていくために、自分自身で目標を設定し、行動計画を立て、責任を持って行動していくことができる能力を育てることにつながるものである。

上記の3つの観点から述べた能力の育成によって、本学習プログラムを通して、生徒一人ひとりが持続可能な社会の発展のために、社会生活上の課題を発見し、自分の問題として捉え、その解決策を考えていく「思慮深さ(反省的態度)」を習得しているものと評価できる。